

# いいなりアプリ・JK編

くペット禁止のマンションに住む俺が、狙ってる女を部屋に呼ぶために小型犬をこっそり飼っていたら、隣のJKが怒鳴り込んできた

体  
験  
版

鬼

畜

の

キ

ク

チ

そ

の

一

俺の名はキクチ。某大学に通っている学生で、ペット禁止のマンションだが、家族タイプで結構広い部屋に悠々自適の一人暮らしをしている。

時刻は十七時を回ったところだったが、昨日・・・というよりは今日の朝までサークルの飲み会があり、まだ寝たりない感じで起こされ、少し機嫌が悪い。

先ほどから部屋に来客を知らせるインターホンが鳴り響いている中、部屋で飼っている小型犬がそれに反応してわめいている。俺はそのせいで目覚めの悪い起こされ方をした。

どれほどの用があるのか知らないが、一向に鳴りやむ事のなさそうなインターホンの機械音にウンザリしながらリビングに向かうと、モニターで訪問者の顔を確認できるテレビタイプのインターホンを設置した壁に向かって、飛び跳ねながらバカ犬が吠えていた。

俺は感情のおもむくまま、小さなバカ犬を蹴り飛ばし、インターホンのモニターを覗いた。

そこに映っていたのは、JKの制服を着た黒髪ポニーテールの女子だった。

その制服姿に魅かれて、俺は思わず応答ボタンを押してしまった。

「はい？何でしょう？」

「あのお！！神崎ですけど、ちょっとイイですかあ！？」

インターホン越しに聞こえてきた声と、映し出された表情で何やら怒っている様子が分かった。このJ  
Kは同じマンションの俺の隣の部屋に住んでいる女の子で・・・たしか“里奈ちゃん”と呼ばれていた。  
隣に住んでいるという事もあり、何度か見かけた事があり、制服の上からでも巨乳だと分かるほどのオツ  
パイちゃんだったので、俺のチェックリストにとまっていた。学校では、生徒会長をしているらしく・・・  
近所のババアたちが大声で自分の娘の自慢話をし合っていたのを耳にした覚えがある。

俺は何か面倒さを感じながらも、巨乳JKの制服を間近で見回したくなったので、ドアを開けて玄関先  
へ招き入れる事にした。

「あのお！お兄さん！このマンションは、ペット禁止なんですよ！なんで犬飼ってるんですか！？」

俺がドアを開けた途端、JK里奈ちゃんは内引きドアを強目に押して玄関先に入ってくると同時に自分の用件を話し始めた。

「私知ってますから！お兄さんがこっさり可愛い小型犬を飼ってるのを！」

すると、来訪者の匂いなのか声に反応したのかは知らないが、リビングのいる小型犬がまた吠え始めた。

「ほらあく！やっぱりい！あれえ！犬の鳴き声ですよねえ！」

自己アピールをするバカ犬によって、JK里奈ちゃんはさらに自分の発言に自信を持ち、俺に言い放った。

たぶんJK里奈ちゃんは今朝通学の途中で、犬の散歩をしている俺を見かけたのだろう・・・帰宅する

なり着替えもせず制服のまま乗り込んできたようだ。そもそも俺がこのバカ犬を飼っている理由は、いま俺が狙っている女子が犬好きだと知り、部屋に連れ込むために飼い始めたのだ。そう、思い返してもムカつく昨日の飲み会の事だ。

サークル仲間と飲みながら、俺は狙っている同じサークルの女子を口説こうとしていた。朝になって電車が動き始めた頃、その女子がまだ半分酔いがある状態で「飼ってるワンちゃん見てみたい」と言い出した。意気揚々と俺は部屋に招き入れたのだが、その女子は部屋に入って俺のバカ犬とジャレ合うと「ワンちゃんと朝の散歩しよ」と言ったので、楽しみは後に取っておくタイプの俺はそのまま散歩に出掛けたのだが、その女子はしばらくして「私そろそろ帰るね♪」と完全に逃げられてしまった。その帰り道の事だろう。JK里奈ちゃんが俺を見かけたのは・・・

「窓開けて勉強したら、犬の鳴き声が聞こえてきて、勉強に集中できないんですけど!」

「じゃあ窓閉めて、エアコンつければいいじゃん」

「そういう問題じゃなくてですね！このマンションがペット禁止のマンションでえ！！」

人が他人に対して物申す理由は幾つかあるだろう。自分の考えと意に反する事柄や、自分の嫌いな部分と似た他人の行動に対して事柄、はたまた相手への妬みからそれを否定する場合など人それぞれだろう。さつきJK里奈ちゃんが俺に対して『こっそり“可愛い小型犬”を飼ってる』と言った事から推測すると、自分も可愛い犬を飼いたいけどペット禁止マンションだという理由で親に怒られた……そんなヤルせない思いを俺にぶつけに来たのだろう。

「ええ？じゃあ、どこかに捨てて来いって言うの？」

「べ、別に捨ててなんて言ってません！別の飼い主を探すとか……あなたがここを引っ越すとかすればいいんじゃないですか？」



「引越すって・・・そんな簡単に出来るわけないでしょ？」

「と・・・とにかくこのマンションはペット禁止なんですから！それに散歩中の・・・ウンチとかそのまま放置するの良くないですよ！」

学校で生徒会長をしているとは言え、まだまだお子ちゃま・・・ルールに縛られた社会ほど、極めて曖昧なモノだという事を知らないようだ。仕方が無い・・・狙ってた女に使うつもりだったけど、アレでちよっと遊んでやるか。

「里奈ちゃんだっけ？・・・まあそんなにかりかりしないで、ちょっとコレ観てよ」

「かりかりなんてしてません！」

俺はいつナンドキも手放す事のないスマホに、あるアプリの画面を表示して、里奈ちゃんに見せた。

「何ですかあ？・・・癒しアプリ？そんなのでゴマかされませんよ！」

里奈ちゃんはそのアプリの画面を覗き込んだ次の瞬間、俺はアプリの撮影ボタンをタップした。

カシャ！

里奈ちゃんの耳にも聞こえるように、カメラで撮影したと分かるシャッター音が鳴った。

「ちょっと！ナニ勝手にヒトの写真撮ってるんですか！」

里奈ちゃんの反応は当然の事だろう。この温厚な俺でも、あまり知らない人間に何の脈絡もなく写真を撮られた日には、そいつのスマホを奪ってボコボコに顔を殴ったあげく、そのスマホを木っ端微塵に粉砕して、そいつの口の中に突っ込んでやる事だろう。

「お兄さんがやった事は盗撮と一緒にですよ！今すぐさつき撮った私の画像、削除して下さい！」

ここで撮影した画像を削除してやれば・・・里奈ちゃんの一時的な怒りが収まり、先ほどの用件だった事柄など『コレに比べたらどうでも良い事』になって、すぐに退散してくれる事だろう。それで俺的には問題解決になるのだが、このアプリで撮影した画像はもっと面白い事に使えるのだ。

「スマホ貸して下さい！自分で削除しますから！」

撮影したスマホを渡せと言わんばかりに詰め寄ってくる里奈ちゃんを尻目に、俺はアプリの画面を確認

した。

【いいなり奴隷登録完了】

先ほどこのアプリで撮影した里奈ちゃんの画像の上に“登録完了”の文字が書かれており、画面を上にフリックすると、このアプリの説明文が書かれている。俺はこのアプリが本物だという事を以前テストで知っていたが、一読した。

【いいなり奴隷アプリ…人体コントロール・言語タイプ】

このアプリで撮影された者は、その端末所有者の「いいなり奴隷」となる。

端末所有者の言語によって「いいなり奴隷」となった者の“身体をコントロールする”ことが出来る。

注意事項…催眠状態にするような心・精神をコントロールするものではない。ご理解の上、お楽しみを。尚、このアプリ使用者は奴隷登録完了時から、その奴隷対象者を解除するまで一分毎に三■円課金され、

端末所有者に請求する。

——と書かれている。

ついでに語るなら、この【いいなりアプリ】をどこで入手したかは秘密である。俺がこのアプリの入手方法をヒトから聞いた途端、その教えてくれた人間は原因不明の突然死になったからだ。このアプリは、そういう代物で本物なのだ。

「なんで、いきなりカメラで撮ったんですか！？意味が分かりません！早く画像削除して下さい！」

決して俺から強引にスマホを奪い取ろうとはしないものの、自分の正当性は揺ぎ無いものという意思を持った口調で里奈ちゃんは俺に延々と息巻いていた。

「ねえ、里奈ちゃん……どんなパンティー履いてるか見せてよ」

そんな里奈ちゃんに、俺はこのアプリの実現性に何の疑いもなく軽い口調で言い放った。

「え？いま何て言ったんですか？」

人は、時に自分の予想だにしない事や自分の都合の悪い事に対して、間違いなく耳で聞こえているにもかかわらず、自分の脳が何を言っているのか分からない状態になり、瞬時に聞き返す事がある。今まさに里奈ちゃんは、そういう状態だったのだろう。

だが、里奈ちゃんはその自分の問いを口にした次の瞬間――。

里奈ちゃんは、自分の手で制服スカートの両裾を掴み、自分のおへそが見えるほどに素早くめくり上げた。

そして、そこに露わになった――。お年頃的女子が履いていそうな里奈ちゃんの可愛い純白のパンティ

―は、小さいながらも秘密の花園をしっかりと隠していた。





い

い

な

り

の

里

奈

そ

の

一

私が隣人さん宅に訪れたのは、マンションのルールを守ってもらったためでした。

今から思えば、マンションの管理人さんに言って問題を解決すれば良かったのかもしれませんが、私は実に感情の赴くまま、自分が正義だと信じて、ルールを破っている大人が許せませんでした。

「ねえ、里奈ちゃん……どんなパンティー履いてるか見せてよ」

「え？いま何て言ったんですか？」

不意に飛び込んできた隣人さんの言葉に、どう言い返せばいいのか分からず、私は聞き返しました。

すると、突然、スカートが恥ずかしいぐらいめくれ上がり……。私は、目の前にいる隣人の男性が、変質者のようにスカートをめくり上げたのだと一瞬思い込みました。

「ちょっと！何するんですか！！」

そう口にしたものの、すぐさまスカートの裾を持ち上げているのは自分だという事に一瞬で気が付きました。すかさず、私はスカートが風でめくれ上がったのを押さええるように、下着を隠しました。

「なに言ってるの？いきなり里奈ちゃんが自分でスカートをめくったんじゃない♪」

隣人の男性は、私がすでに気づいている事を改めて自己認識させるように言ってきました。どのくらいの間スカートをめくっていたのか分かりませんが、たぶん一瞬だったと思います。しかし、隣人の男性のイヤラしくニヤケたその表情から、私の下着を目にしたのは明らかでした。

「もお！とにかく！ペットの件、今日中になんとかして下さいよね！！じゃあ失礼しました！」

私は、自分の行動に混乱し、冷静な思考が働いていませんでした。自分の履いている下着を覗かれて恥

ずかしかつたのもあり、とにかくこの場から去りたい気持ちでいっぱい、自分でスカートをめくつたのを無かった事にするべく最初の用件を口にしました。

「せっかくだからさあぐもつとじっくり里奈ちゃんのパンティーを見せてよおぐ♪」

隣人の男の言葉は、私にとって身の毛もだつもので身体が凍りつきそうでした。

「はあ？それ立派なセクハラですよ！」

負けず嫌いな私は、隣人の変態男に向かって捨て台詞のつもりで言い放ち——。そして、玄関のドアノブを触った時、自分の下半身にあるべき物がない事に気づきました。

それは、そう——。私がスカートを脱いだ時と同じ感覚。生徒会の仕事を終えて学校から自宅に帰り、すぐさま塾へ行く準備をするため、自分の部屋で制服から私服に着替える。まずは、ファスナーを下ろし

やすいように制服のスカートをクルリと回し、ファスナーを下ろした瞬間、手を離すと重力に従って床にストンとスカートが落ちる。それが無意識に行っている私のスカートの脱ぎ方。

なぜかその状況が、今まさに行われ、私はスカートを履いておらず、隣人の男が私のお尻をイヤらしい眼で観ていました。

「里奈ちゃん・・・お尻のワレメにパンティー食い込ませちゃってえくエロなあゝ」

この度は、体験版をダウンロードして頂き、誠にありがとうございました。

この物語はフィクションにつき、実在の人物、企業・団体名及び登場人物とは一切関係ありません。